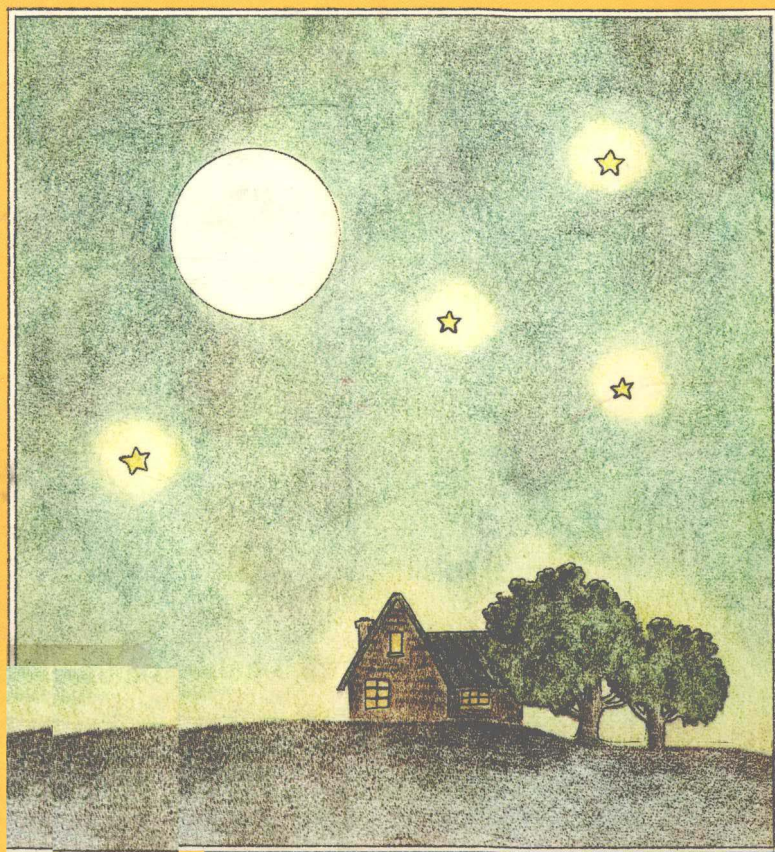
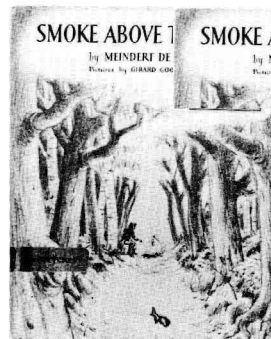






あとがき

白木 茂

この本は、マインダート・デイ・ヤング (Meindert De Jong, 1906 ~) の "Smoke Above the Lane, 1951" を訳したものです。

作者デイヤングは、オランダ生まれのアメリカ人で、かれほど、いろいろな児童文学賞を受賞した作家もすくないでしょう。一九六二年には、国際的な児童文学賞として有名なアンデルセン大賞を受賞し、文字どおり現代アメリカの代表的な児童文学作家のひとりです。

この物語は、ユーモアにあふれた動物物語で、子どもがひとりも登場しないのですが、浮浪者とスカンクとのあたたかな心の交流が、リズムのある文章で、じつに生き生きとえがかれています。

また、小さなスカンク一匹のために、小さな町の人たちが大さわぎするありさまが、まるで目に見えるようにえがかれてもいます。



ぼんばいライブラリ

ちびスカンクの大ぼうけん《文研子どもランド》

訳者 白木 茂 発行者 佐藤武雄

基本カード記載例

N.D.C. 933 デイヤング作 白木 茂訳
ちびスカンクの大ぼうけん
文研出版 1976 88p 23cm 文研子どもランド

発行所 文 研 出 版 東京都文京区向丘 2-3-10 大阪市天王寺区大道 4-128

©白木 茂 1976

印刷所 西口印刷株式会社 / 製本所 倉橋製本株式会社

BS-761101

ちびスカンクの大ぼうけん

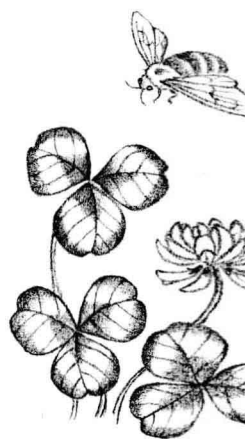
ディヤング 作

白木 茂

本庄 久子 絵



文研出版



森の中に、浮浪者がいて——ホットケーキをつくっていた。おなじ森の中に、小さなスカンクが、木の切りかぶのうろにすわって——浮浪者をじつと見まもっていた。

森のそばに、長い、古めかしい貨物列車がとまっていた。貨物列車は森のそばにとまっていて、森のずつとむこうまで、つづいていた。たつぷり一マイルはありそうだ。

そう、それは、朝早くのことである。

遠い北国にある、この小さな森では、朝がまだ早いので、朝日ものぼっていないかった。九月の最初の週にはいったばかりだというのに、森の中はさむかった。

あまりさむいので、大男の浮浪者は、ホットケーキをつくるのをやめて、大きな、つめたい両手をごしごしこすりあわせた。

大男の浮浪者は、小さなスカンクが、自分を見まわっているのを知らなかった。ホットケーキをつくるのにいそがしかったからだ。

浮浪者は、小さなほのおの上に、鉄板をのせて、ホットケーキをやいていた。たき火のずつと上のほうには、トマトの大きなあきかんがつるしてあった。——コーヒーもわかしていたのだ。

そうだ、大男の浮浪者は、小さなスカンクがすぐ近くにいることを知らなかった。かれは、小さな森の小川のほとりで、小さなたき火をおこし、朝食をこしらえながら、た



のしそくに鼻歌をうたった。

なつかしいバージニアに

わたしをつれてかえつておくれ

浮浪者は、そう小声でうたっていた。

せつせと、朝食をこしらえながら、かれは、ちよくちよく、ふつと鼻歌をやめては、木だちをすかして見た。貨物列車をじつと見まもつたのだ。

小さなスカンクのほうは、浮浪者を、じつと見まもりつづけた。木の切りかぶの、くらしいろにすわつて、浮浪者を見まもりながら、たのしそうな鼻歌に耳をかたむけていた。スカンクは、すわつたまま、鼻をくんくんさせた。たき火のけむりといっしょに、おいしそうなホットケーキとコーヒーのにおいが、ただよつてきたからだ。

スカンクは、うれしそくに、ゴロゴロのどを鳴らした——ごくちつぽけな音だった。

小さなスカンクは、浮浪者が、早くどこかへいつてしまえばいいと思つた。そうすれば、たき火のところへいつて、こぼれているホットケーキのかけらをひろえるからだつた。それは、毎朝のきまりになつていた——浮浪者が、この北国の小さな森へやつてき

てからというもの、もう何週間も、ずうつとそうしているのだ。

小さなスカンクは、浮浪者のことをよく知つていた。スカンクは、浮浪者が好きだつた。ホットケーキのかけらのせいもあるし、たのしそうな鼻歌のせいでもあつた。

小さなスカンクは、よく浮浪者の足あとをたどつていつた——ほんのおもしろはんぶ

んに。スカンクは浮浪者がすきだったのだ。けれども、浮浪者のほうでは、ただのひと、小さなスカンクを見かけたことはなかった。

けきの浮浪者は、いそいでいるようだった。せかせかとホットケーキのさいごの一口をたべおわり、トマトのあきかんからコーヒーをのんでしまうと、のこった熱いホットケーキをなん枚か、上着のポケットにしまいこみ、たき火をふみけした。

それから、いそいで小川へいって、コーヒーのはいっているトマトのあきかんをすぎ、かんの口のところまで水をくんだ。

大男の浮浪者は、水をいれたトマトのあきかんを、上着のもういっぽうのポケットにしまうと、足早に小さな森をぬけて、長い古めかしい貨物列車のほうへあるいていった。大男の浮浪者がいってしまつと、さつそく、小さなスカンクは木の切りかぶのうろからでてきて、火のきえたたき火のほうへ、ぶらぶらやってきた。そして、ホットケーキが、一かけらおちているのをみつけてたべた。もつとないかとさがしたけれど、もうおちていなかった。

小さなスカンクは、ぶらぶら小川の岸へいくと、ちよつぱり水をのんだ。それから、たき火のそばに、またもどつてきたが、もう、ホットケーキのかけらは、おちていなかった。そこで、小川の岸へいくと、また、すこしばかり水をのんだ。

浮浪者のほうは、森のはずれまできていた。小さな森にそつてめぐらしてある鉄道のさくのところへ浮浪者はきていた。

大男の浮浪者は、長い貨物列車のはしからはしまで、注意ぶかく、じつと見わたした。だれのすがたも見えなければ、だれの声もしない。浮浪者はよろこんだ。

浮浪者は、いそいで、力まかせに、さくの板を一まいはぎとると、その重い板をかついで、貨物列車にそって、いそぎ足であるいていった。

そのうちに、屋根のついた貨車で、氣にいったのがみつかった。浮浪者は運んできた板で、その貨車の戸を、どおんについてあけた。

浮浪者はもう一ど、貨物列車のはしからはしまで見わたした。人の声も聞こえないし、人のすがたも見えない。

浮浪者は、貨車の中をのぞきこんだ。カラッポだった。浮浪者は、うれしそうに、にっこりわらうと、貨車の入り口に板をわたし、坂になった板をのぼって、大いそぎで貨車の中へはいりこんだ。

浮浪者は、貨車のいちばんおくの、いちばんくらいすみっこにいくと、ポケットからトマトのかんをとりだして、だいじそうに床においた。それから、古いトマトのかんのそばに、長ながとねそべった。

浮浪者は、貨車の戸をしめもせず、わたしかけた板をほうりだしもなかったので、板は、あいている入り口に、さしかけたままになっていた。

浮浪者は、ねむってしまった。

小さな森では、スカンクが、またまた、すんだつめたい小川の水をのみにいった。す



んだつめたい小川の水は、森の中をまがりくねりながら流れていた。

小川の水は、たおれた木ぎの下では、ゴボゴボと音をたて、ずっとむかしにかれてしまった木の切りかぶのまわりでは、うずをまいて流れていた。

そういった切りかぶの下をほっているうちに、小さなスカンクは、おいしそうな地虫をみつけた。スカンクは、地虫をかじった。うれしくて、ゴロゴロ……のどを鳴らした——ちいぢやな、ちいぢやな音だった。なんて、おいしい地虫なんだろう。

小さなスカンクは地虫をたべてしまうと、浮浪者がふみけたたき火のところへもどってきた。だが、こんどは、ホットケーキのかけらをさがしにきたのではない。足あとを——あの足の長い浮浪者の足あとをさがそうとしているのだった。

やっと、一つ、みつけた！

小さなスカンクは、目には見えない足あとを一つ、また一つと、せかせか……たどっていった。足あとをたどりながら、小さなスカンクは森をぬけていった。

大男の浮浪者の足あととは、あいだがひどくはなれていた。ここに一つあったかと思うと、ずっとむこうのほうに、目には見えない足あとが一つ、といったぐあいなのである。けれども、小さなスカンクは、それこそ、はつきり目に見えるみたいに、ちゃんと足あとをたどっていった。目に見えるはずはなかった。この小さなスカンクは近視だったからだ。でも、その小さな、しわのよった鼻のおかげで、まるで見えるみたいに、ちゃんとたどっていけるのだった。

小さなスカンクは、足あとをたどっていきながら、ゴロゴロ……小さな音を、のどでたてていた。

小さなスカンクは、浮浪者を知っていたし、すきだったのだ。浮浪者の大きな足あとをたどっていくのも、すきだった——ほんのおもしろ半分だった。が、なんとなしに、浮浪者がすきだったのである。

小さなスカンクは、鉄道のさくのところへでた。浮浪者が立ちどまった、ちようどそ



の場所^{ばしょ}で、小さなスカンクも立ちどまった。

だが、小さなスカンクには、貨物列車^{かちゅうれっしや}は、目にはいらなかった。近視^{きんし}なので、そんな遠く^{とほ}までは見えなかったのだ。いや、小さなスカンクにしてみれば、足^{あし}あとをたどっていただけなのだった。

小さなスカンクは、浮浪者^{ふろうしや}の足^{あし}あとをたどりながら、さくの下をくぐり、貨物列車^{かちゅうれっしや}にそって進^{すす}んでいくうちに、ななめにわたしてある板^{いた}のところにやってきた。

小さなスカンクは、のびあがって、板^{いた}でつめをといでいるうちに、板^{いた}に浮浪者^{ふろうしや}の足^{あし}あとのにおいをかいだ。そこで、板^{いた}をのぼっていった。これが、とんでもないまちがいだつたのだ。

小さなスカンクとしては、ここまで、いそぎにいそいだ。だが、その足^{あし}どりは、ひどくのろいものだった。

小さなスカンクが板^{いた}をのぼっていったとき、北国^{きたくに}の太陽^{たいやう}が森の上から、貨車^{かしゃ}の入り口を明^{あか}るく^{あか}てらしていた。

あたたかな朝日^{あさひ}をあびて、小さなスカンクは、いい気持^{きもち}ちになった。毛皮^{けがわ}をとおして、骨^{ほね}まであたたかい。あんまり気持^{きもち}ちがいいので、小さなスカンクは、貨車^{かしゃ}の入り口の日だまりに、ごろつと横^{よこ}になると、ふさふさしたしっぽを、くるつと鼻^{はな}と目にまきつけてねむってしまった。

これが、とんでもないまちがいだつたのだ！

とんでもないまちがいというのは、この長い、古い貨物列車は、小さな森のそばの待避線にとまって、急行列車がすごい速さで通過するのをまっているだけだったからである。その急行列車が、ゴウツと本線走りさつてしまつと、のろい貨物列車は、動きだし、ガタンゴトン……とゆれながら、北国をゆつくりはなれていくはずだった。

小さなスカンクは、そんなことはすこしも知らなかつたし、だいいち、汽車というものも知らなかつた。

浮浪者は、貨車のすみのほうでねむっていた。小さなスカンクのほうは、朝日のさしこむ貨車の入り口でねむっていた。

そのとき、ゴウツとすごい音をたて、ヒュウツと悲鳴をあげながら、急行列車がすごいいきおいで通過していったのだ。そのすごい音と悲鳴に、浮浪者もスカンクもびつくりして、両方ともとびあがつてしまった。

浮浪者がとびあがつたとたんに、いきなり、ぐらつと貨車が大きくゆれて、貨物列車が動きだしたのだ。ぐいつと大きくゆれたはずみに、大男の浮浪者は床にたたきつけられた。

貨車が大きくゆれたはずみに、浮浪者は床にたたきつけられたばかりか、あいていた入り口にさしかけてあつた板も投げとばされてしまい、貨車の戸も、ゆれた力で、ぴしやつとしまつてしまった。

重い戸がぴしやつとしまつたので、からつぽの貨車の中は、まっくらになった。

小さなスカンクはすくみあがり、床にぺちゃんとはいつくばって、ふるえていた。浮浪者のほうは、床にたたきつけられたまま、ぴくりともしないで、横たわっていた。頭をうつて気をうしなってしまったのだ。身動き一つしない。

一マイルもつづく長い貨物列車のはるかせんとうで、古ぼけた機関車が、うめくように、ポウツと汽笛を鳴らした。鐘が、ガラランガラン……と鳴った。

ハッハッとあえぎ、力をふりしぼる機関車のあとから、長い貨物列車はうめき声をあげて、ガタンゴトン……ゆれながら、小さな森のそばをはなれ、本線にもどっていった。貨物列車は走りだした。ガタンとゆれながら、まがりかどをまがると、もう小さな森はとおぎかってしまった。

こうして、貨物列車は走っていき、小さなスカンクもいっしょに運ばれていったのだ。わが家としていた小さな森から、すんだつめたい小川から、大きな木から、地虫をほりだした木の切りかぶから、どんどんとおぎかっていった。これは、とんでもないまちがいだったのである。

くらい貨車のすみっこにたおれていた、足の長い浮浪者は、やっと意識をとりもどし

た。むっくり起きなると、ずきずきいたむ頭をさすりさすり、ぶつくさもんくをならべたてた。

「こんな発車のしかたって、あるもんか。これで機関手だなどといえたぎりかい。」

浮浪者は、ふたたび、頭をさすりだしたが、ふと思いついたことがあった。いそいで、くらやみの中を手さぐりで、トマトの罐をさがしだすと、長いゆびを一ぽん、かんの中につつこんで水の量をしらべた。

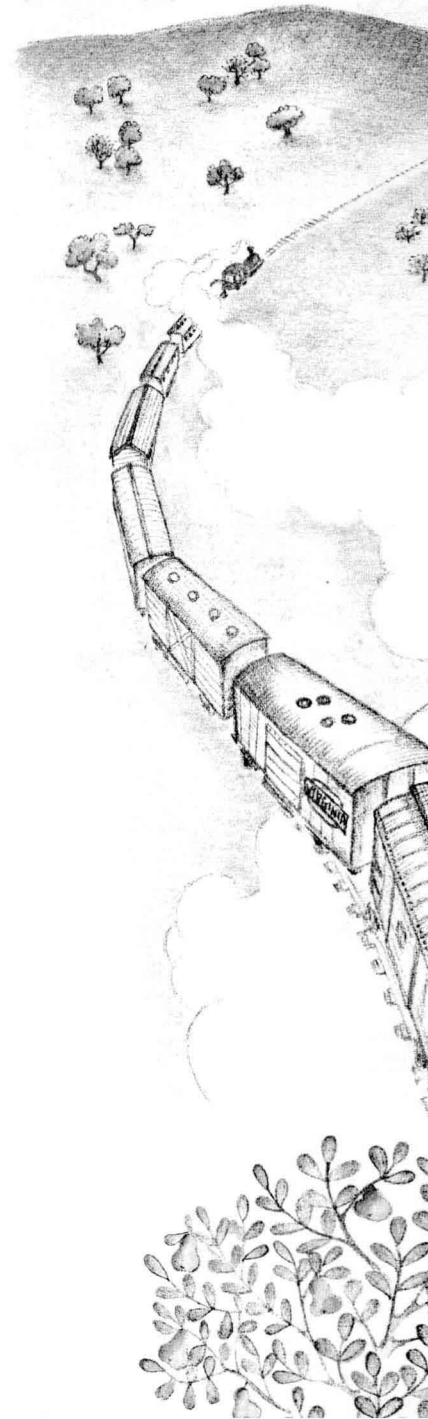
（ああ、やっぱり思ったとおりだ。）

浮浪者は、ためいきをつくと、

（水が半分以上もこぼれてしまったわい。これでよくも機関手でございますなどといえるもんだな。）

このころには、浮浪者の目も、くらやみになれてきていた。浮浪者は、きゆうに、からだをまえにのりだすと、しまっている貨車の戸のほうをじつとすかして見た。

もう一ど、目をこらして見たとき、浮浪者はうしろへひっくりかえりそうになった。



（まさか！ まさか、あれはスカンクじゃあるまいな。まさか、おれはスカンクといつしよに、貨車にとじこめられてしまったんじやあるまいな。とんでもない！）

浮浪者は、おちつきをとりもどしてきた。ぺちゃんとはいつくばっている小さなスカンクのほうをながめながら、くらがりの中でいっしょうけんめい、ちえをしぼった。

「はて、どうしたらいいものだろうな。」

大男の浮浪者は、スカンクがいっしょにいることがわかってからというもの、身じろぎひとつ、できなかった。

小さなスカンクは、ぴくりともせず、床にへばりついていてた。おびえきっているのだ。汽車というものを知らなかったし、いつもかたい地面になれていたせいである。

地面は、バンバン……とびあがったり、ガタンゴトン……ゆれたりしない。小さなスカンクは、どうしたらよいのかわからなかった。ただもうおそろしくて、身動きひとつできなかったのだ。

スカンクがおびえきり、ぴくりともしないで、じつとしているのを見ると、大男の浮浪者は勇気がわいてきて、スカンクに話しかけた。

「どうだ、おまえは、こわがっているんだろう。ここには、いたくないんだな。よしよし、おれがたすけてやる。いいかい、まず、あの戸をあけておいて、気持ちのいい、やわらかな葉っぱが山のようにもっているところへくるまでまつんだ。そこで、おれは足で一おし、おまえを葉っぱの山まで、おくりとどけてやろうというわけよ。」

大男の浮浪者は、小さなスカンクが返事をするのをまっっているようなふうだったが、じきに、また、話しだした。

「足で、すつと一おし、それだけでいいんだ。だが、そうするには、その戸のそばまでいかなくちやならない。ところが、おまえは、戸のまえに、すわりこんでるじやないか。」

おれがそばへよつていくと、おびえてるおまえは一発ぶつばなし、しつぽをふりまわして、この貨車じゆうに、おいをまきちらすんじゃないかと、それがしんばいなんだよ。

おれは、びんぼうな、年とつた浮浪者さ。服の着がえなんか持つてるもんか。そうかといって、この貨車からおりて、着てるものを一週間、地面にうずめたままにしておき、おまえのすごいにおいをけすというわけにもいかないしさ。水が半分しかはいつていないトマトのかんで、水あびをするわけにもいかないしよ。」

浮浪者は、小さなスカンクにたのみこむのをやめると、なお、しばらくのあいだまつて、ようすを見ていたが、とうとう、思いきつて戸口へ進みはじめた。

貨車のかべにそつて、じりじりとスカンクのほうへにじりよりながらも、たえず、やさしい声で、親しみをこめ、話しかけて、どうにか、ペしゃんとはいつくばっているスカンクのところへいきついた。

小さなスカンクは、からだじゆうの力をふりしぼり、ぜんぶのつめを床にたてて、し